

意志のあるお金とは

愛知県・岡崎市立矢作北中学校 1年 和泉 愛

わたしは、小学6年のときに、市の商工会議所が主催した『ジュニア・エコノミー・カレッジ』に参加をした。5人1組になって仮想の株式会社を設立して、実際に販売を体験するというものである。5か月間をかけて、物を売ることの基本的な知識を得ることから、販売実践の成果の発表やまとめまでを行った。

この体験を通して、わたしのお金に対する考え方は、今までとは変わってきたことを感じた。それは、“お金には意志がある”ということだ。

自分がものを買うときは、お金を払って自分がどれだけ満足できるかどうかを考える。得になると思えばものを買うし、ならないと思えば買わない。そのことは、売っている側に対して、『意志』として伝わる。そのことを、販売実践を経験し、ものを売る立場に立つことで、強く感じる事ができた。

販売の計画を立てるときに、『付加価値』という言葉が初めて知った。材料費に加え、技術や見た目、雰囲気などをプラスして商品として売る工夫のことだと説明を受けた。わたしは、自分がものを買うときのポイントは、この『付加価値』にあって、それが良いものだったり、正しいものだったりしたときに、それを表す意志として、お金が払われるのだと思った。

わたしたちは、自分たちの会社でホットドッグを売ろうと計画した。お金を出す人のことを考えた工夫が大切だと思い、大人から子どもまで喜んでもらえるような工夫を考えた。大人にはホットやアイスのコーヒーをいっしょに販売し、子どもには風船のプレゼントをつけることを考えた。また、出来たてを食べてもらえるように、調理の手順にも気を配った。

最初はなかなか売れず心配になったが、短時間で完売したときは、自分たちの考えた工夫がお客さんに伝わり、それに対していいなと思ってくれたということが嬉しかった。

販売実践が終わって、決算報告^{けっさん}を行い、市に対して売上の10%を、税金として

納めることも行った。税金の大切さについては、小学校で税務署の方が開いてくれた、『租税^{そぜい}教室』によって知ることができた。税金がないと、わたしたちの暮らしは、とてもひどいものになってしまう。わたしたちの会社が納めた税金は、ほんの少しの額だけれど、いつか、どこかで役に立つんだと考えると、自分たちが^{がんば}頑張ってもらったお金が人の役に立ったり、自分の暮らしを安心なものにしていくために使われたりすることは、とても尊いことのように思えた。税金は、払う、払わないなど、人の意志に関係なく義務として集められているように思うけれど、自分のお金が、みんなが住みよくなるために使われているんだということを知り、考えることで、『意志のある』お金になるように思う。

こんな経験を通して、以前よりお金に対して少し考え方が変わったときに、『世界を変えるお金の使い方』という本を読んだ。そこには、これだけお金があれば、社会のためにこんなことができるという事例が、100円単位から書かれている。例えば、100円あれば、経済的にも、教育的にも貧困に苦しむアフガニスタンの子ども5人に教科書を1冊ずつ買ってあげられるそうだ。東日本大震災は、わたしたちに、チャリティーや募金という形で、意志を表すお金の使い方を考えさせてくれるきっかけになったと思う。使うことで、自分も誰かも幸せになれるということが、とてもいいお金の使われ方ではないだろうか。

この本には、『お財布からの投票』という文章がのっている。「消費者や投資家は、社会や環境にやさしい企業の商品、サービス、株などを購入することで、世界をより良くしていくことができます。それは、自分のお財布を使って良い企業に投票するのと同じこと」だという。この考え方は、今までのわたしに新しい見方を与えてくれた。ものを買うことや、買わないことで、世界に対して自分の意志を示すことができる。わたしの年齢では、まだうまく判断できないかもしれないけれど、地球や、人々にやさしい商品を選んで買うように心がけることを続けていこうと思う。

そのためにも、たくさんの商品やサービスに、もっと分かりやすいマークや目印がついたり、お店の人が説明してくれたりするとういなどと思う。わたしたちがホットドッグを売るのに一生懸命工夫をしたように、お金のより良い使い方、人のため、地球のためになるような使い方がもっと広く知られる工夫が、わたしたちのような子どものお金の使い方を良くしていくきっかけになると思う。

大切なお金だから、世の中にしっかりと自分の意志が伝わる使い方をして
いきたい。

<参考文献>

山本良一責任編集、Think the Earth プロジェクト編『世界を変えるお金の使い方』ダイヤモンド社、2004年

